

## 高良芳枝先生伝説のレッスン

2018年10月28日、「高良先生を偲ぶ会」が京王プラザホテルで開かれ、遠方からの方を含め100名を超える出席者の中、先生の素晴らしい演奏風景（共演・井上二葉氏）や、幼少期からのお写真などを映像で拝見し、様々な思い出のスピーチを聞かせて頂き、本当に感動的なひとときを過ごすことができた。

筆者にとっても、おそらく他の多くの門下生の方同様に、高良先生は人生最大の恩人としか言いようのない存在で、その記憶に支えられながら、演奏・教育活動を行っている。その伝説的なレッスンの結果、高良先生の薫陶を受けた多くの音楽大学教員やピアノ教師で、そのレッスンが評判になっている人が多いのもうなずける。

先生のレッスンの素晴らしさ、ユニークさを整理しながらまとめるとともに、懐かしい思い出をいくつか挙げてみたい。

### ◆ レッスン

私は、高校生になって初めて高良先生のレッスンを定期的に受けるようになったが、それまでは、ツェルニー50番一曲、ましてや大半のショパンやリストのエチュードなど、手が痛くならず弾けることは殆どない、という情けない状態であった。バッハにしても、手こそ痛くならないまでも、声部の弾きわけが不十分であることは悩みの種であった。

たまたま比較的得意だったバッハのパーティータ5番を初回のレッスンで聴いて頂いたので門下生に加えて頂けたが、おそらくショパンのエチュードなど弾いたら無理だったのではないかと思う。それまで脱力のだの字も教わったことがないといんでもない生徒を、それが生業として成り立つところまで引き上げて下さったレッスンの秘密を探りたい。

### ◆ 徹底的な脱力指導（触り、触らせるレッスン）

ピアノのレッスンでは、曲の様式や構造を把握し、イメージをつかむという側面と、アスリートのようにそれを実現するための身体の使い方を学ぶ側面がある。

私の主な悩みは後者に集中しており、とにかく手も腕もがちがちで演奏する非常にまずい癖がついていたので、高良先生はまさに救世主のような存在で、こんなレッスンというものがあったのか、と衝撃を受けた。

腕や手首が硬くてうまく弾けない時には、まず自分の手首や、肘、腕などを生徒にもたせて、正しいあり方を体感させた上で、生徒の手首や肘などをもち、その硬さ、柔軟性の不足を理解させる、というもので、非常に具体的でわかりやすかった。

また、多声部を片手で弾く声部の弾き分けについては、生徒の手のひらを脱力してペタンと鍵盤の上に置かせ、その上で先生が重心のかけ方の手本（たとえば5の指に重さをかけて、その他の指は軽く、その重さの割合は10:3くらいにといった的確な指示が出された）を示すものであった。

腕による速い打鍵については、上腕を持たせて手本を示して下さったが、上腕の動きが、腕を持つ手が降り落とされるほどのスピードであることに驚いた。

手のひらが硬直して、三度のエチュードなどが弾けなかったときは、手のひらを触らせて、いかにふにゃふにゃな状態で弾いているかを理解させてくださった。

昨今は、セクハラ問題が多く取り上げられ、ピアノ教師は、特に異性の生徒に対して、触ってよいものか、迷ったりすることもあるが、私自身は、言葉と手本を示すのみで終わらない、触って体感させる教授法は、非常に効果的であるということを身をもって学んだし、力説したいと思う。

以下、またおりを見て下記のような項目を追加していきたいと思います。

- ◆ お手本の素晴らしさ
- ◆ 曲の選択の適切さ（受験前）
- ◆ 他の先生の紹介（御木本先生とのチーム協力体制）
- ◆ 本番前のスケジュール管理のすごさと、骨身を惜しまない指導
- ◆ 知らない曲も、嫌いな曲も徹底指導
- ◆ 常に勉強を続ける姿勢
- ◆ バッハの声部ひきわけの神業
- ◆ スタインウェイとヤマハ
- ◆ リサイタルを聴きたかった...
- ◆ 高良先生名言集

近藤伸子（1978～92年、東京藝術大学および大学院修士・博士課程にて高良先生に師事。現在国立音楽大学教員）